鴨川　明子・服部　美奈　編著

『東南アジアのリバース・ジェンダー・ギャップ ――進む女性の高学歴化は何を意味するのか』



（明石書店、2025 年 7 月、264 頁）

尾中　文哉

本書は、比較教育学を専門とする気鋭の研究者たちが「リバース・ジェンダー・ギャップ」をキーワードに東南アジア諸国を取り上げて論じた本である。

この用語は、ニューヨークタイムズで 2011 年に登場したのをきっかけに、世界レベルでは Natasha Ridge が先駆的な研究（2014）を行った後国際的に研究されるようになり、日本では野崎の研究（2012）を皮切りに広がったとのことであるが、それらを背景にして、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジアなどを取り上げて詳しく論じている。

アジアは女性が抑圧されがちで教育が遅れがちな地域というイメージが強いが、これらの地域についていえば、むしろ高等教育は女性のほうが古くから上回っていたかもしくは最近女性のほうが進学率が高くなっている場合が多いのである。

執筆者たちは優れた論考を発表してきた方々であり、その情報収集力と知識を活用して、本研究所の紀要にふさわしいこのテーマについて共同して論じてくれている。提示されている国連レベルあるいは各国レベルの量的データ・質的データはともに大変たしかなものであり、それをこれらの国々で基準を統一して提示してくれているため、これらの地域の「リバース・ジェンダー・ギャップ」の様子を公平な仕方で俯瞰させてくれる。また、これらの地域にとどまらず世界レベルで大陸別、所得水準別にジェンダー・パリティ・インデックスを整理してあるのも、現在の世界のなかでの「リバース・ジェンダー・ギャップ」の分布を示すことになっており価値が高い。さらに本研究所の特徴である社会調査という面でも、貴重なインタヴュー調査・アンケート調査・参与観察の結果が紹介されている。

以下では、本書の主な内容を国別に若干紹介したい。

マレーシアでは中等後教育と大学教育で「リバース・ジェンダー・ギャップ」が明確となるが、その要因として親の教育期待や試験中心の体系で女性の学業達成が高いことを指摘しつつ、他の要因としては。男性の海外留学やブミプトラ政策 (マレー人優遇策) をあげる。また、「男子はどこへ」問題として、職業に直結しやすい高等専門学校に似たポリテクニクへの進学傾向が生じていることを教育省のインタヴュー調査から明らかにする。また、「かわいい男子学生」問題として、男性は真剣さや几帳面さに欠ける、という印象を持たれていることをインタヴュー調査を通して明らかにする。

インドネシアでも修士・博士でなくディプロマ・学士については女性の進学比率が高い。これは国立難関大学についてもそうである。この要因として著者は、PISA の成績から男子の成績不振を指摘する。国家主導で女性の役割を強調する「イブイズム」はあるが、それが必ずしも進学抑制に結びつかず高学歴化を推し進める場合もあるという。また、アンケート調査・インタヴュー調査からは、最近の若い世代が、新しいジェンダー認識を得つつあることもみてとれるという。

フィリピンでは後期中等教育ですでに女性の優越が目立つようになる。これは生徒自身について「学校への興味の欠如」といった要因があるほか親や教師も女子への学業期待が高いという要因があるという。また、関連する事情として宗教的背景について論ずる。フェミニスト神学は世界的な流れとしてあり、カトリックの盛んなフィリピンでも「第三世界神学者エキュメニカル評議会」など様々な団体が活動しているという。そのほかに、ババイランという伝統的な女性専門職能者が尊敬を集めていたり、「チウダッド・デ・ミステイカ・デ・ディオス」という新興宗教団体 (教祖は女性) が信者を集めていたりすることも、「リバース・ジェンダー・ギャップ」の背景にあるとされている。

タイでは準学士課程では男子が多いものの学士課程大学院課程どちらも女子が多くなる。その要因は、直接的には PISA 調査にあらわれる女子の点数の高さがあるという。そのほかに僧侶・軍人・警察官といった男性に開かれた地位獲得ルートが女性にはないこと、家族の中で養い手役割を期待されていることが、逆に女性の高学歴化に結びついているという。また、同性婚を認める「婚姻平等法」にみられるようなジェンダー多様化のなかで、女性も LGBTQ+ も「自立」が重要になってきているからであると論じている。

カンボジアでは、高等教育では男子優勢になるものの、後期中等教育では女子の就学率のほうが高いという。この背景には伝統的な「男性は金、女性は白い布」という考え方に対し政府が「女性は宝石」として再定義していることもあるという。しかしながら、古典舞踊ロバム・ボランが女性であることを強い条件としていることに表れるように、強い伝統的ジェンダー観が存在しており、それが他の東南アジア諸国のような「リバース・ジェンダー・ギャップ」の発生を妨げていると指摘している。

こうした諸論考をまとめたうえで、統計的に男子を上回るという量的側面だけでなく、「Work（働く）」/「Life（生活する）」/「Learning（学ぶ）」の 3 つの質的側面の頭文字をとり「I（私）」という概念を中心に据えた WILL モデルというものを提示するが、編者は「リバース・ジェンダー・ギャップ」を「ローカルなまなざしから読み解く」ことが重要であり、『多様性と複雑さ』は、まさに東南アジアの特徴である」と結ぶ。上記の内容にもあらわれるように、「東南アジアのリバース・ジェンダー・ギャップ」が単一の要因やメカニズムによって起こっているというよりは、それぞれの地域においてローカルな様々な要因やメカニズムにより起こっているために、その程度やあり方も様々だというのが、明示された穏当な見方である。ただ、それと同時に、要因である「男子はどこへ」問題や「ジェンダー多様性」問題、そして何より「リバース・ジェンダー・ギャップ」が複数の地域にまたがって観察されていることから、歴史的にであれ文化的にであれ社会的にであれ、何か共通の要因やメカニズムを探す作業がありうるということを、明示的にではないものの示唆してくれているという点も大変興味深い。

（おなか　ふみや　日本女子大学現代社会学科教授）